

国語科『現代の国語』シラバス

北海道常呂高等学校

学年	1	単位数	2	授業形態	一斉		
教科書 (出版社)	新 現代の国語 改訂版 (三省堂)	副教材等 (出版社)	新現代の国語 学習課題ノート(三省堂) 書いて覚える 漢字練習ノート 二訂版 (啓隆社) 「論理の力」を育てるシリーズ 1日10分言語力ドリル入門「読む・書く」(第一学習社)				
学習目標	<p>○実社会に必要な国語の知識や技能を身に付ける。</p> <p>○論理的に考える力や深く共感したり想像したりする力を伸ばし、他者との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えを広げたり深めたりする。</p> <p>○言葉のもつ価値への認識を深めるとともに、生涯にわたって読書に親しみ自己を向上させ、我が国の言語文化の担い手としての自覚をもち、言葉を通して他者や社会に関わろうとする態度を身に付ける。</p>						
学習方法	<p>○(知識等の)吸収→思考→表現のサイクルを毎時間、毎単元で意識する。</p> <p>○目の前の物事に興味を持ち、「なぜ？」と疑問を持つ。</p> <p>○授業時間毎・単元毎の目標を理解し、そこに到達するための見通しをもつ。</p> <p>○自分の理解度を客観的に評価し、予習や復習などを自主的に行う。</p>						
学 習 評 価	評価の観点	評 価 の 観 点 の 趣 旨					
	ア 知識・技能	実社会に必要な国語の知識や技能を身に付けている。					
	イ 思考・判断・表現	論理的に考える力や深く共感したり想像したりする力を伸ばし、他者との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えを広げたり深めたりしている。					
ウ 主体的に学習に取り組む態度	上記ア、イの力を身に付けるにあたって、粘り強く取り組み、自らの学習を調整している。 (全単元この趣旨に沿って評価するため、下記「評価規準」の記載は省略)						
評価方法	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
観点	実力考査	単元考査	小テスト	発表・発言	提出物の内容等	宿題の内容等	作品制作
ア 知識・技能	○	○	○	○	○	○	○
イ 思考・判断・表現	○	○		○	○	○	○
ウ 主体的に学習に取り組む態度				○	○	○	○

学習計画（「単元」末尾の括弧内は指導領域と予定授業時数）

学期	編・章	単元【観点】	学習内容（教材）	評価の観点			評価規準	評価方法
				ア	イ	ウ		
前 期 中 間	1 た わ か り 合 う	○内容や構成、論理の展開を捉え、文章の要旨を把握したり情報を関連づけて考えたりしよう【読む(5)】	・情報を関連づけてまとめる（「ひとりではないということ」星野源、「聞く力」阿川佐和子）	○	○	○	・言葉には、認識や思考を支える働きがあることを理解している。 ・常用漢字の読みに慣れ、主な常用漢字を書き、文や文章の中で使うことができる。 ・文章の種類を踏まえて、内容や構成、論理の展開などについて叙述を基に的確に捉え、要旨や要点を把握している。	②～⑥
	2 確 か な 情 報 を 伝 え	○情報を適切に編集し、自分の考えを発表しよう【話す・聞く(8)】	・情報と適切につきあう（「ひとまず、信じない」押井守） ・情報を適切に編集する（情報を編集し、的確に発表する—パブリックスピーチ）	○	○	○	・話し言葉と書き言葉の特徴や役割、表現の特色を踏まえ、正確さ、分かりやすさ、適切さ、敬意と親しさなどに配慮した表現や言葉遣いについて理解し、使うことができる。 ・情報の妥当性や信頼性の吟味の仕方について理解を深め使うことができる。 ・自分の考えが的確に伝わるよう、自分の立場や考えを明確にするとともに、相手の反応を予想して論理の展開を考えるなど、話の構成や展開を工夫することができる。	④～⑥
前 期 期 末	4 よ り よ い 読 み 手 に な る た め に	○文章の内容や形式、論理の展開を分析して評価しよう【読む(5)】	・説明の方法を理解する（「水の東西」山崎正和） ・さまざまな視点から情報を捉える（「コインは円形か」佐藤信夫）	○	○	○	・実社会において理解したり表現したりするために必要な語句の量を増すと同時に、語句や語彙の構造や特色、用法及び表記の仕方などを理解している。 ・個別の情報と一般化された情報との関係について理解している。 ・目的に応じて、文章や図表などに含まれている情報を相互に関係付けながら、内容や書き手の意図を解釈したり、文章の構成や論理の展開などについて評価したりするとともに、自分の考えを深めている。	①～⑥

前期期末	5 場に 応じて 伝える ために	○相手に 応じて 構成や 展開を 工夫し、 根拠を 明確に して自 分の考 えを伝 えよう 【話す・ 聞く (9)】	・根拠を 明確に して考 えを伝 える (「中身 当てク イズ」 佐藤雅 彦) ・相手 を意識 して自 分の考 えを伝 える (構成 や展開 を意識 して発 表する —— プレゼ ンテー ション)	○	○	・話し 言葉の 特徴や 役割、 表現の 特色を 踏まえ、 正確さ、 分かり やすさ、 適切さ、 敬意と 親しさ などに 配慮し た表現 や言葉 遣いにつ いて理 解し、使 うこと ができる。 ・常用 漢字の 読みに 慣れ、 主な常 用漢字 を書き、 文や文 章の中 で使う ことが できる。 ・話し 言葉の 特徴を 踏まえ て話し たり、 場の状 況に応 じて資 料や機 器を効 果的に 用いた りする など、 相手の 理解が 得られ るよう に表現 を工夫 するこ とがで きる。 ・論理 の展開 を予想 しながら 聞き、 話の内 容や構 成、論 理の展 開、表 現の仕 方を評 価する ととも に、聞 き取っ た情報 を整理 して自 分の考 えを広 げたり 深め たりす ること がで きる。	④～⑥
	3 情報 を生か すため に	○防災 について の文章 を読み、 多様な 人に伝 わる言 葉で書 こう【書 く(11)】	・情報を 集めて 選ぶ (「人が 死なな い防災」 片田敏 孝) ・情報 を整理 する (「減災 学を作 る」矢 守克也) ・多様 な人に 伝わる 言葉で 書く (「やさ しい日 本語」 で防災 に関す る文章 を作 る)	○	○	・言葉 には認 識や思 考を支 える働 きがあ ること や、主 張と論 拠など 情報と 情報と の関 係につ いて理 解して いる。 ・語句 や語彙 の構造 や特色、 用法な どを理 解し、 話や文 章の中 で使う ことを 通して、 語感を 磨き語 彙を豊 かにし ている。 ・目的 や意図 に応じ て、実 社会の 中から 適切な 題材を 決め、 集めた 情報の 妥当性 や信頼 性を吟 味して、 伝え たいこ とを明 確にし ている。	④～⑦
後期中間	6 説得 力を高 めるた めに	○説得力 を高め るため に引用 の目的 や効果 的な説 明の仕 方を考 えて原 稿を書 こう【書 く(12)】	・引用 の目的 やはた らきを 理解す る (『「ま るごと のあな た」を』 伊藤亜 紗) ・説明 の仕方 を考え る (「小さ な哲学 者」中 村安希) ・情報 を活用 する (情報を 整理し て伝 える—— 説明文)	○	○	・文、 話、文 章の効 果的な 組立て 方や接 続の仕 方、引 用の仕 方や出 典の示 し方、 それら の必要 性につ いて理 解し使 うこと がで きる。 ・実社 会との 関わり を考え るため の読書 の意義 と効用 につ いて理 解を深 めてい る。 ・読み 手の理 解が得 られる よう、 論理の 展開、 情報の 分量や 重要度 などを 考 えて、 文章の 構成や 展開を 工夫す ること がで きる。 ・自分 の考え や事柄 が的確 に伝わ るよう に、根 拠の示 し方や 説明の 仕方 を考 えると とも に、文 章の種 類や、 文体、 語句な どの表 現の仕 方を工 夫す ること がで きる。	④～⑦
	7 して いく ため に	○話し 合いの 意義や 手法を 理解し、 より良 い話し 合いを しよう 【話す・ 聞く (8)】	・伝える ことの 意味や 方法を 理解す る (意思 決定・ 合意形 成のた めの話 し合い)	○	○	・比喩、 例示、 言い換 えなど の修辞 や、直 接的な 述べ方 や婉曲 的な述べ 方、推 論の仕 方、引 用の仕 方や出 典の示 し方、 それら の必要 性につ いて理 解し使 うこと がで きる。 ・論点 を共有 し、考 えを広 げたり 深め たりし なが ら、話 合いの 目的、 種類、 状況に 応じて、 表現 や進 行など 話し 合いの 仕方 や結論 の出 し方を 工夫す ること がで きる。	④～⑥
後期期末	8 より よい 書き 手に なる ため に	○事例 と主張 の関 係を意 識しな がら小 論文を 書こう 【書く (12)】	・事例 と主張 の関 係を 整理 する (「あり のまま の世界 は見 えない」 田中 真知、 「もの とこと ば」 鈴木孝 夫) ・自分 なり の考 えを まと める (情報 を活用 して説 得的に 書く—— 小論文) ・意図 が十分 に伝 わる 書き 方を 探 る (書いた 文章を 批評し 合う—— 推敲)	○	○	・文、 話、文 章の効 果的な 組立て 方や接 続の仕 方、推 論の仕 方につ いて理 解す ること がで きる。 ・目的 や意図 に応じ て、実 社会の 中から 適切な 題材を 決め、 集めた 情報の 妥当性 や信頼 性を吟 味して、 伝え たいこ とを明 確にし ること がで きる。 ・目的 や意図 に応じ て書か れてい るかな どを確 かめ て、文 章全 体を 整え たり、 読み 手か らの助 言な どを踏 ま えて、 自分 の文 章の特 長や課 題を 捉え直 したり するこ とが で きる。	①～⑥

指導領域毎の時数

指導領域	話すこと・聞くこと	書くこと	読むこと	
授業時数の計	25時間	35時間	10時間	計70時間